第13講　日本の近代思想②・現代思想

1　日本の近代文学

①明治期の文学―近代的自我の確立―

明治時代の人々は,旧来の封建制社会の枠組みから離れ,近代国家の一員となっていく過程で悩みを抱えることが多かった。特に「家」中心で生きてきた日本人にとって,「個人」をどう考えるかは大きな問題だった。過度な自己主張は,当時の社会状況と合っていなかったので,文学者たちはその折り合いのつけ方を模索した。

A　**ロマン〔浪漫〕主義**→日清戦争前後

旧来の制度や価値観の束縛から脱し,みずみずしい感情や情熱を肯定(こうてい)することを通じて自我や個性を解放すべき,と主張した文学・芸術運動。理性よりも感情を重視した点に特徴がある。

あ　**北村透谷(とうこく)**（1868～94年）→詩人・評論家

自由民権運動に挫折した後,自己は「実世界」ではなく**「想(そう)世界」**の充実を通じて確立されると論じた。雑誌『文学界』を創刊し,文学の中で信仰と愛による自由の実現を説く。精神の欲求を実現する方法として恋愛を重視したが,理想と現実のギャップに悩み,26歳で自殺した。主著『内部生命論』。

※肉体的な「外部生命」より精神的な**「内部生命」**を重視した。

い　**与謝野晶子(よさのあきこ)**（1878～1942年）

自己の感情を大胆に謳(うた)い上げることを通じ,封建的な道徳・倫理観の打破と社会の改造を試みた。夫の与謝野鉄幹(てっかん)とともに雑誌『明星(みょうじょう)』を創刊し,戦場の弟を想い**「君(きみ)死にたまふこと勿(なか)れ」**と厭戦(えんせん)詩を詠み話題となった。歌集『**みだれ髪**』が有名。

B　**自然主義→**日露戦争前後

自己の内面を直視し，ありのままの自己と社会の有りようを表現しようとする文学が流行。同時期，現実の社会問題を扱った社会小説も多く出された。

※苦戦の末に賠償金が取れなかった日露戦争を経験し，徒(いたずら)に理想を唱える空(むな)しさへの反省から生まれた現実的な文学。人間の赤裸々な姿を捉えようとするあまり，醜(みにく)さを強調する傾向があった。

あ　島崎藤村(とうそん)（1872 ～ 1943 年）

北村透谷・樋口一葉(ひぐちいちよう)らと雑誌『文学界』に参加し，詩集『若菜集(わかなしゅう)』を発表するなど，当初はロマン主義の詩人。のち『破戒(はかい)』『夜明け前』など，自然主義の小説家となった。

い　その他の自然主義文学と作家

『蒲団(ふとん)』『田舎教師』（田山花袋(たやまかたい)），『武蔵野(むさしの)』（国木田独歩(くにきだどっぽ)）など。

C　**夏目漱石(そうせき)**（1867 ～ 1916 年）

イギリス留学経験のある教育者・文学者として，日本の近代化を上辺(うわべ)だけの「**外発的開化**」として批判。内面からの「**内発的開化**」であるべきとし，日本人は真の意味での自己を確立する必要があると説いた。彼の考えでは，**エゴイズム〔自己中心主義〕は否定されるべき**で，自己の義務を自覚して他者に依存せず，他者を尊重するのがあるべき個人であるとし，このような**自己本位(ほんい)**（⇔他人本位）に基づき生きる**個人主義**を主張した。

主著『吾輩(わがはい)は猫である』『坊(ぼ)っちゃん』『三四郎』『それから』『門』『行人(こうじん)』『こゝろ』『**明暗(めいあん)**』。講演に『現代日本の開化』『**私の個人主義**』がある。

※晩年は，東洋の伝統思想に影響を受けて「**則天去私(そくてんきょし)**（天に則(のっと)り私を去る）」の境地(きょうち)を目指した。これは，狭い自我への執着を捨て，大きな自然に従って生きるという意味である。

D　**森鷗外(おうがい)**（1862 ～ 1922 年）

医学の勉強のためドイツに留学した後，ロマン主義的小説『**舞姫**』を発表。陸軍軍医として勤務した後，歴史小説に転じた。彼の説く「**諦念(ていねん)〔レジグナチオン〕**」は，むやみに自我を主張するのでなく，現実的な社会において自らの立場や役割を冷静に引き受けながらも，そこに自己を埋没させまいとする考え方であった。他の著書に『青年』『阿部一族』『高瀬舟』などがある。

※森鷗外は，現状の社会制度や価値観は，あくまでも仮のものにすぎないと考えていた。しかし，諦念の精神に基づき，それらが真理で「あるかのように」ふるまうことで社会生活が成立する，と「かのように」の哲学を説いた。

②大正・昭和前期の文学

A　夏目漱石に影響を受けた人たち

随筆家の寺田寅彦（とらひこ），小説家の芥川龍之介（あくたがわりゅうのすけ），哲学者の阿部次郎ら。

※阿部次郎は，自己に対する尊厳を失わず，人格の向上に満足を見出す「人格主義」を唱えた。

B　**白樺派→**雑誌『白樺』

近代的自我を，楽観的に明るく主張。旧来の思想や道徳に追従（ついじゅう）することなく，各々（おのおの）が人間的な感情や善意を生かして理想的人格を完成させるべき，と主張した（＝人道主義〔理想主義〕）。代表的作家は，宮崎県に「新しき村」を建設した**武者小路実篤（むしゃのこうじさねあつ）**や，その友人の志賀直哉（しがなおや）・有島武郎（ありしまたけお）ら。

C　耽美（たんび）派

永井荷風（かふう）・谷崎潤一郎（たにざきじゅんいちろう）ら。

D　**宮沢賢治（みやざわけんじ）**（1896 ～ 1933 年）

岩手県出身。法華経に傾倒し，農業と宗教・芸術の融合を目指し農民芸術を説いた。

詩集『春と修羅（しゅら）』，童話『注文の多い料理店』『銀河鉄道の夜』など。

※「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」「雨ニモ負ケズ」などの言葉を残す。

③ノーベル文学賞と戦後の文学

A　ノーベル文学賞受賞者

川端康成（やすなり）（『伊豆の踊子（おどりこ）』『雪国』），大江健三郎（『飼育』『ヒロシマノート』）。

B　その他の有名作家

太宰治（だざいおさむ）（『斜陽』『人間失格』），松本清張（せいちょう）（『点と線』），司馬遼太郎（しばりょうたろう）（『竜馬（りょうま）がゆく』），安部公房（こうぼう）（『砂の女』），三島由紀夫（ゆきお）（『仮面の告白』），村上春樹（はるき）（『ノルウェイの森』）など。

〈*Note*〉

２　日本の近代哲学と民俗学

①日本の近代哲学

臣民は「法律の範囲内」なら自由に生きてよい，と大日本帝国憲法で謳（うた）われたこともあり，日本でも「どう生きる」を考える学問が発生した。それは，哲学の伝統がない日本に西洋哲学を移植・融合するところから始まった。

A　**西田幾多郎**（きたろう）（1870～1945年）→「西田哲学」

京都帝国大学教授。自己の哲学の根底に坐禅体験を置きつつ，ギリシャ以来の西洋哲学についても理解を深めた。主著『**善の研究**』『自覚に於（お）ける直観と反省』『無の自覚的限定』。

※西洋哲学では，主観･主体（＝認識する自分の意識）と，客観･客体（＝認識される対象物）を対立的に捉える。彼は，主観と客観が分かれる以前の**「主客未分**（しゅかくみぶん）**」**状態で直接的に経験することの内にこそ真の自己が存在するとして，この経験を**「純粋**（じゅんすい）**経験」**と呼んだ。

※「個人あって経験あるにあらず，経験あって個人あるのである」と語り，独我論から脱することができたとし，倉田百三（ひゃくぞう）（劇作家・評論家）ら大正期の青年に多大な影響を与えた。

B　**和辻哲郎**（わつじてつろう）（1889～1960年）→日本の代表的倫理学者

東京帝国大学教授。夏目漱石，西田幾多郎の影響を受ける。ドイツに留学し，実存主義のハイデッガーにも関心をもち，西洋思想を理解しながら，日本独自の倫理学を生み出した。主著『**人間の学としての倫理学**』『倫理学』。

※彼は，西洋の人間観を個人の視点に偏（かたよ）りすぎだと批判し，真の自己は，個人と社会との相互作用により成立し，一方を重視しすぎるものではないとした。また，人間は他人との相互関係で存在しうる**「間柄**（あいだがら）**的存在」**であり，自己は大切だが孤立はせず，社会に埋没（まいぼつ）する存在でもないと考えた。

※和辻哲郎は，日本の文化や精神，風土と精神の関係などの研究にも功績を残した。『**古寺**（こじ）**巡礼**』では，奈良の古寺に残る仏教芸術が，中国･インド･ギリシャなどの古代芸術と多くの共通点をもつことを指摘した。また，『**風土**』では，世界各地の自然・文化風土と，そこに生きる人々の精神的特徴を研究した。

C　**九鬼周造**（くきしゅうぞう）（1888～1941年）

京都帝国大学教授。ヨーロッパに留学してフランスのベルクソンやドイツのハイデッガーに影響を受ける。帰国後，最新の西洋哲学を紹介するとともに，「野暮（やぼ）」に対する「粋（いき）」という江戸時代の美意識を分析し，『**「いき」**

の構造』を著した。

D　その他の哲学者

仏教哲学者の**鈴木大拙**(だいせつ)（1870 ～ 1966 年，西田幾多郎の友人），マルクス主義系歴史哲学者の三木清(みききよし)（1897 ～ 1945 年, 特高警察に検挙され獄死）など。

②日本の民俗学

民俗学とは，庶民の生活の中に伝わる知識や文化，すなわち民間伝承や習俗を研究する学問をいう。

A　**柳田国男**(やなぎたくにお)（1875 ～ 1962 年）**→日本民俗学の祖**

彼は，日本民族の歴史・文化の基盤は，村落など共同体に生きる無名の人々（＝**常民**(じょうみん)）の生活にあると考えた。そして，従来の有名人中心・文献中心の歴史学を批判，常民の習俗や儀礼の中に日本文化の真の姿を求め，各地の民間伝承を筆録するなどして研究を進めた。主著**『遠野物語』**(とおの)『先祖の話』。

※村落共同体の景観と信仰の関係についても考察を深め，民俗学を，日本人の精神を探究する学問として**新国学**とも呼んだ。

B　**折口信夫**(おりくちしのぶ)（1887 ～ 1953 年）→国文学者・歌人としては釈迢空(しゃくちょうくう)

柳田国男の知遇を得て，民俗学・国文学・芸能史にまたがる研究を行い，特に神のあり方について考察した。主著は小説『死者の書』。

※神の原型は, 海の彼方(かなた)にある常世国(とこよのくに)から定期的に村落を訪れる来報神**「まれびと」**であり, 人々は共同体の外部に理想的な世界を思い描いていたと考えた。

※近世以来の伝統的な国学を批判的に継承し, 自らの学問を「新国学」とした。

C　**南方熊楠**(みなかたくまぐす)（1867 ～ 1941 年）→生物学者（とくに粘菌学）でもある

民俗学に加え生物学者でもある彼は，小規模神社の３割以上を廃止する神社合祀令（1906 年）が出された際，古い社や鎮守の森が破壊されるとして反対運動を起こした。

※鎮守の森は，人々の信仰心や共同性を育むものとして必要であり，生態学の研究対象としても重要だと主張した。

D　**柳宗悦**(やなぎむねよし)（1889 ～ 1961 年）→哲学者・美術評論家でもある

白樺派の一員でもあった彼は，無名の職人によってつくられた実用品に日本の美を発見し，**「民芸」**という造語を広めた（＝**民芸運動**）。

※朝鮮半島の芸術・文化にも高い価値を見いだした。

E　その他

『忘れられた日本人』を著し離島(りとう)研究をした宮本常一(つねいち)（1907 ～ 81 年）など。

３　大正デモクラシー以後の思想

①大正デモクラシーの思想―大正期―

日清・日露戦争に連勝して明治末期に不平等条約が改正され，日本は名実ともに列強の一員となった。国際社会では，第一次世界大戦（1914 ～ 18 年）後の平和体制確立やロシア革命（1917 ～ 22 年）の成功もあり，自由主義的な風潮とともに社会主義的な風潮も強まっていた。日本では，**（天皇主権である大日本帝国憲法の枠内で）政党政治や普通選挙などの市民的自由を求める風潮**が広がり，「**大正デモクラシー**」と呼ばれた。

※その下で，労働争議・小作争議・普選運動・**女性解放運動**・**部落解放運動**（『水平社宣言』を起草した西光万吉（さいこうまんきち）ら**全国水平社**による）・**超国家主義運動**（『日本改造法案大綱（たいこう）』を著した**北一輝（きたいっき）**らによる）など，各種の**社会運動**が盛んになったが，1918 年に全国で起きた米騒動のように，過激化することもあった。

A　**美濃部達吉（みのべたつきち）**（1873 ～ 1948 年）→法学者

天皇は法人としての国家の最高機関である，という**天皇機関説**を唱え，大正デモクラシーの理論的支柱となった。

※のち，満州事変後の「昭和ファシズム」の風潮の下で，貴族院議員辞職・著書発禁に追い込まれた（1935 年，天皇機関説問題）。

B　**吉野作造（さくぞう）**（1878 ～ 1933 年）→政治学者

東京帝国大学教授であった彼は，雑誌『中央公論』誌上に『憲政の本義を説いて其（その）有終の美を済（な）すの途（みち）を論ず』を寄稿し**民本主義（みんぽん）**を提唱した。あくまでも天皇主権の枠内で市民的自由を求める，という新しい発想は，社会主義・超国家主義すなわち左右から批判を浴びたが，経済学者・文学者・教育学者らとともに啓蒙思想団体の黎明会（れいめいかい）を組織し，大正デモクラシーを牽引（けんいん）した。

C　**石橋湛山（たんざん）**（1884 ～ 1973 年）→評論家・政治家

雑誌『東洋経済新報』で軍備や植民地を放棄する「小日本主義」を唱え，第一次世界大戦後の国際平和体制における日本の方向性を示そうとした自由主義者。

※第二次世界大戦後は，大臣や首相を歴任した。

D　**平塚らいてう**〔明（はる）〕（1886 ～ 1971 年）→女性解放運動家

明治末期，初の女性文学団体である**青鞜社（せいとう）**を興し，**雑誌『青鞜』**創刊号の「**元始，女性は実に太陽であった**」という言葉で「新しい女」の生き方を主張，女性の自立を呼びかけた。のち市川房枝（ふさえ）（1893 ～ 1981 年）・奥むめお（1895

〜 1997 年）らと新婦人協会を結成し，女性の社会的地位の向上を訴えた。

※大正時代，与謝野晶子と平塚らいてうの間に「母性保護論争」が起きた。与謝野は「経済的・精神的自立を果たさない女性には子を産む資格なし」，平塚は「国が母親に対し福祉政策をとるべき」と主張した。

※女性解放運動は，自由民権運動に参加した岸田〔中島〕俊子や**景山〔福田〕英子**らを先駆とする。

②昭和ファシズムと戦後思想―昭和期―

1920 年代の経済恐慌の連続を経て，30 年代以降，戦争への道を向かう過程で，全体主義的な**「昭和ファシズム」**期に突入し，治安警察法や治安維持法により，言論・思想統制が行われるようになった。戦時中は，画一的な戦争協力への姿勢を求められたが，戦後，自由な言論が認められて活発化した。

A　**小林秀雄**（1902 〜 83 年）→文芸評論家

批評形式を取りつつ自らの思想を表現する，近代批評の確立者。西洋とも中国とも異なる日本文化の伝統に関心を深め，古典や美術を研究した。著書に評論**『様々なる意匠』**，随筆**『無常といふ事』**などがある。

B　**坂口安吾**（1906 〜 55 年）→小説家

終戦後，評論**『堕落論』**を発表し，日本や日本人がどん底まで堕ち切るところから再生が始まる，と説いた。小説『白痴』も有名。

※ 太宰治らとともに「無頼派」の代表作家。

C　**丸山真男**（1914 〜 96 年）→政治学者

『超国家主義の論理と真理』『日本政治思想史研究』などを著し，日本には自由・平等などの理念が全く育っていなかったこと（＝近代の未成熟）を批判，「無責任の体系」として天皇制や軍国主義を論じた。

※彼は，本来，近代社会であれば，人々は日々の生活から得た経験を自ら検討し，その結果に基づいて自由かつ主体的に行動するはずだとした。この点で，個人の自由が制限されていた戦前の日本は近代国家の水準に達していなかった，と分析し，国家を再生しようとする戦後の学生たちの爆発的な支持を得た。

D　その他の評論家

『雑種文化』の加藤周一，『共同幻想論』の吉本隆明など。

第13講　倫理確認テスト

1　雑誌『文学界』を創刊したロマン主義の代表的な文学者で，肉体的な「外部生命」よりも精神的な「内部生命」を重視し，「想世界」の充実を主張した人物とは？

①　北村透谷　②　島崎藤村　③　樋口一葉　④　与謝野晶子

2　夏目漱石が晩年に目指した境地とは？

①　諦念　②　則天去私　③　間柄的存在　④　まれびと

3　森鷗外の代表作としてふさわしくないものを一つ選べ。

①　『舞姫』　②　『青年』　③　『阿部一族』　④　『破戒』

4　武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎らが所属したグループとは？

①　明六社　②　自然主義　③　白樺派　④　耽美派

5　『善の研究』を著した，日本近代哲学の先駆者とは？

①　西田幾多郎　②　鈴木大拙　③　九鬼周造　④　柳宗悦

6　和辻哲郎の著作としてふさわしくないものを一つ選べ。

①　『風土』　②　『古寺巡礼』
③　『人間の学としての倫理学』　④　『「いき」の構造』

7　1906年に発布された神社合祀令に反対した民俗学者とは？

①　柳田国男　②　折口信夫　③　南方熊楠　④　宮沢賢治

8　天皇機関説を唱え，大正デモクラシーの理論的支柱となった人物とは？

①　石橋湛山　②　北一輝　③　吉野作造　④　美濃部達吉

9　雑誌『青鞜』を創刊し,「元始,女性は実に太陽であった」と寄稿した人物とは？

①　景山英子　②　与謝野晶子　③　平塚らいてう　④　市川房枝

10　『様々なる意匠』などで,日本の近代批評を確立した人物とは？

①　小林秀雄　②　丸山真男　③　加藤周一　④　吉本隆明

解答

1	①	2	②	3	④	4	③	5	①
6	④	7	③	8	④	9	③	10	①